

夢への架け橋

千葉県 学校法人東京聖徳学園
光英VERITAS中学校 3年
田端 美海（たばた みみ）

コーヒーの香りと、スイーツの甘い匂いが広がるカフェの店内で、私はある人を待っている。「はじめまして。」覚えてたての手話で挨拶をした。

聴覚に障がいをもつ、山口トモさん。私が山口さんを知ったのは、数ヶ月前。「聞こえないセンパイの課外授業」というテレビ番組で、ろう学校の教壇に立った山口さんの姿に衝撃を受けた。耳に障がいがあることをものともせず、コーヒーチェーン店で接客業をこなしている。お客さんもスタッフも聞こえる人ばかりの中で、工夫してコミュニケーションをとる術を自ら見出だして発信し、聞こえないからという理由で、夢を諦めないでほしいと、生徒たちに訴えかける。私がもし耳が不自由だったなら、直接人と会話することを避け、バックヤードで働く選択をするだろうと想像した。生徒たちの大半は、聞こえていた時になりたかった職業に就く夢を諦めたと言った。そんな思いを覆す山口さんの前向きな姿勢と、優しく包み込むような言葉に、深く心を揺さぶられた。電波越しに伝わる見えない力が、私を強く動かした。私は思いの丈を手紙に書き綴った。この手紙に感動してくださった山口さんから返信があり、職場である鎌倉のカフェでの対面が実現したのだ。

山口さんは、声を発することが出来るので、山口さんの声を聞き取ることは可能だが、私が話す声は山口さんには聞こえない。手話の出来ない私は、口を大きく動かして読み取ってもらったり、なんとなくのジェスチャーや、スマホ画面、筆談等でやりとりをする。会話中、表現しやすい言葉を手話で教えてくださり、手話を知ってほしいという思いが優しく伝わってくる。働く姿は、健常者と何も変わらない。スタッフさんも、慣れた手話で自然とコミュニケーションをとっている。そんな光景を目の当たりにし、この職場は、障がい者と共に働く、理想のチームワークが築き上げられているのだと、確信した。山口さんは感謝を口にする。「私がここで働けているのは、自分の力だけでは成し得ないこと。共に働くスタッフの協力、理解、優しさがあってこそ。」と。

山口さんの勤める会社は、障がい者の雇用や教育体制等について、先端をリードする模範的な企業のように感じる。知的、身体、精神、様々な障がいを抱えるスタッフが、全国に350名以上在籍し、個人の特性を生かし、今日も店舗に立っている。障がいの有無に関係なく、人と人との間に先入観や思い込み、偏見といった心のフィルターをもたないというメッセージに、企業の魅力を感じる。このような企業が日本に広く浸透し、これが当たり前の形となってほしい。

あの日、別れ際に山口さんが私をハグしてくれた時、何かを託された気がした。一緒に何かを変えたい、そんな気さえた。中学生の私には、まだ大きなことを動かす力は備わっていないが、今沸き上がる小さな気付きや思いが、いつか行動に起こせる原点になるのではないだろうか。

私が調べていく中で目に留まったのは、特に、大学等で行われている「ノートテイク」という支援だ。聴覚に障がいを抱える学生に対して、研修を受けた学生有志が、授業内容を要約筆記したり、その場で起こっていることをリアルタイムに文字にして伝える役割を担っている。聴覚障がいをもつ学生に対して、他の学生が得られる情報と同じ情報を平等に提供することが目的だ。今、全国の大学の約70%に何らかの障がいのある学生が在籍しており、約75%の大学で、支援対策がなされているそうだ。3年後、私の進学先にこのような制度があれば、積極的に参加したいと思う。私の耳が、私の手が、誰かの学びを助け、誰かの人生の夢を支える一人となるのなら、この上なく光栄なことだ。複雑な数学の計算が解けることや、見たこともない漢字を使えることも立派な学びだが、障がい者等への理解や実践に繋がる教育が、社会生活において、より重要ではないだろうか。身近に学べる仕組みが整えば、より多くの人福祉に携わることができ、手を差しのべる社会が当たり前になっていくのではないだろうか。

人は支え合って、毎日の生活が成り立ち、自分に無いものを補いながら、生きることの大切さを学んでいる。夢をもち、それを叶えたいと思う気持ちは皆平等で、同じスタートラインに立つ権利がある。私は将来、音楽に携わる仕事がしたいと思っているように、障がいをもつ人たちが、障がいを理由に諦めることのない社会を築きたい。私は、健常者と障がい者、双方の立場に寄り添える架け橋となって、共に支え合える社会の実現に貢献したい。障がい者が一人では渡れなかった向こう岸の景色を見に、これまで成し得なかった新しい世界を見に、共に歩こう！この手で、夢を掴もう！